

噶爾丹侵入當時の外蒙喀爾喀葛

井邊, 一家

<https://doi.org/10.15017/2340975>

出版情報 : 史淵. 19, pp.226-246, 1938-12-10. 九州帝国大学法文学部
バージョン :
権利関係 :

噶爾丹侵入當時の外蒙喀爾喀

井 邊 一 家

(一)

噶爾丹の外蒙喀爾喀侵略の動機となつたのは喀爾喀内部に於ける内寇であつた。即ち喀爾喀右翼内部に於ける私闘が左右兩翼の勢力争となり、その結果は左翼勢力の伸張擴大となつた。この左翼の喀爾喀制覇が普通蒙古に於ける越境奪略等に基く私闘とは性質を異にし、大きな政治上の問題に伸展した。厄魯特蒙古噶爾丹の武力干渉となり、之れ等の仲裁問題をめぐつて、清朝と西藏が渦中に投じ、西北一帯は十年にわたる大きな戦亂時代を現出した。この大動亂をとほして外蒙喀爾喀は清朝の治下に入ることになり、又これ以後清朝の勢力は遠く新疆西藏にまで及ぶことになつた。この内紛時代の喀爾喀と噶爾丹の初期の關係について一考察を試みたいと思ふのである。

喀爾喀は後には四大部四盟に分れたが、康熙卅一年までは左右兩翼の二大部であつて、左翼の長は土謝圖汗、右翼の長は扎薩克圖汗であつた。以下皇朝藩部要略によつて略述すれば、康熙元年その右翼内

に内紛が起つてゐる。是れより先き扎薩克圖汗諾爾布が卒し、子旺舒克が襲いで汗を稱したが、同族の額琳沁の殺す所となり、同時に土謝圖汗察理多爾濟、賽因諾顏部長丹津喇嘛の兵が額琳沁を撃つて、厄魯特に走らした事件である。これより扎薩克圖汗一族の争が絶えず、旺舒克の死後兄の綽墨爾根が自立して汗を稱したが、その衆は彼に附かず、多く土謝圖汗察理多爾濟に歸した。そこで康熙九年になつて旺舒克の弟成袞が扎薩圖汗號を襲ぐと、土謝圖汗に交渉して額琳沁の亂後左翼に逃亡した部衆を求め、屢々これを交渉したけれども、匿して與へないので、遂に西藏の達賴喇嘛に訴へ出たのである。大清實錄康熙廿三年二月庚子の條に、曾往訴達賴喇嘛。蒙諭七旗曰。爾七旗當共尊扎薩克圖汗。其投左翼人民俱應發還。爲此差扎爾布奈前來蒞盟。而左翼土謝圖汗不至。皇上係我大衆之主。謹以此情上聞。至是。上念喀爾喀累世恭順。職貢有年。不忍其子弟人民離散。遣阿齊圖格隆等。齎敕往諭達賴喇嘛。今彼遣使議和云々とあるが、こゝに曾て達賴喇嘛に訴へて會盟せんとしたといふのは、皇朝藩部要略によれば康熙廿一年になつてゐる。その時土謝圖汗が會盟に來なかつたから、やむなく廿三年になつてそれを清朝に訴へたのである。そこで康熙帝は達賴喇嘛と共に喀爾喀問題を解決せんとして阿齊圖格隆を西藏に送つたのであつた。云ふまでもなくこれまで清朝に於いては事蒙古に關する場合、一々達賴喇嘛の方針に準據した政策をとつてゐた。大清實錄康熙十九年八月戊子理藩院題下に、喀爾喀の進貢に關して喀爾喀の進貢は以前は車臣濟農を首としたが、今扎薩克圖汗が車臣濟農を改めて、厄魯德尼濟農を首として進貢してゐる。達賴喇嘛の給する文内にはこの厄魯德尼濟農を首となすといふ文字がない。これを如何に

すべきかといふことが問題になつてゐる。かゝる些少な問題に至るまで達賴喇嘛の指針が問題になるのであるから、蒙古兩大汗の紛争問題に於いてこれに遣使したのは當然のことであつた。あくで康熙廿五年理藩院尙書阿喇尼は敕をもたらし、達賴喇嘛の使噶爾丹西勒圖と會することになつた。丁度この年成袞が卒して新に扎薩克圖汗を襲いだ沙喇が阿喇尼に隨つて庫倫伯勒齊に赴いたが、土謝圖汗察理多爾濟は親ら來らず、弟の哲ト尊丹巴胡土克圖を使はした。この會盟に於いても何かと紛争を生じ、察理多爾濟は亡命者の半を沙喇に歸したのみで、この長年にわたる問題は圓滿解決の運びに至らなかつた。又この時哲ト尊丹巴胡土克圖は達賴喇嘛の使者噶爾丹西勒圖と席次問題で争ひ、遂に對等の席を占めて會盟に列した。噶爾丹が最後まで喀爾喀侵入の口實として哲ト尊丹巴胡土克圖が達賴喇嘛を侮辱したといふのはこの事件であつた。

以上眺めた如く土謝圖汗の行爲には暴漫無禮な節が多く、廿一年達賴喇嘛の提唱した會盟には出席せず、今又廿五年達賴喇嘛と康熙帝の主唱下に會盟を催したが、土謝圖汗自身の出席をみず、剩へ會盟に参加せる土謝圖汗の弟哲ト尊丹巴胡土克圖は達賴喇嘛の使者とその席を争つて對等の席を占め、扎薩克圖汗の要求する部衆の僅かに半を歸したに過ぎなかつた。かくて扎薩克圖汗沙喇が最後に助力を求めたのは厄魯特蒙古の噶爾丹であつたと思はれる。

當時喀爾喀の覇權を握らんとしてゐた土謝圖汗と厄魯特部の平定に志した噶爾丹は、これ又早くより確執を生じてゐる。同じく皇朝藩部要路によると、康熙十六年厄魯特部の鄂齊爾圖汗は同部の台吉噶爾丹

の襲ふ所となり、土謝圖汗は之を救つたが、鄂齊爾圖汗の殺さるゝに及んで、遂に土謝圖汗は噶爾丹と交戦するに至つた。且つその女を鄂齊爾圖汗の孫羅卜藏布阿喇布坦に嫁せしめてゐる。土謝圖汗は噶爾丹と不和になつてゐたのであるから、今土謝圖汗の勢力に壓倒されんとした扎薩克圖汗がこれに投じたどて不思議とするに足らないのである。土謝圖汗は噶爾丹との間に今又新たに扎薩克圖汗部の問題について敵視することになつたが、この頃噶爾丹が土謝圖汗にむかつて、我等には俄羅斯の援兵があると揚言し、之を云ひてやまずとある(聖武記康熙親征準噶爾記)のをみると、西方厄魯特に朝をとなへた噶爾丹も、喀爾喀蒙古の實權者土謝圖汗に對しては、常にかうした虚勢を張らねばならなかつたのではないか。土謝圖汗が露西亞援兵の事實をしらべて、その實なきを知るに及んで、遂に自ら噶爾丹の所在地に侵入したのである。東華錄廿七年七月壬申澤卜尊丹巴胡土克圖告急奏に、去年噶爾丹。率兵三萬餘分道而來。誘我扎薩克圖汗等叛去。我土謝圖汗領兵追而執之以歸。後噶爾丹之弟多爾濟扎卜等。領兵來掠右翼班第戴青台吉ト圖克森。巴爾丹等人畜而去。土謝圖汗追殺多爾濟扎卜。收回人口。噶爾丹又領兵三路而來。土謝圖汗及西海羅卜藏滾布。領兵前至噶爾丹所駐之地。遇達賴喇嘛使者所遣人。宣示皇上諭和之旨。遂退駐楚克獨斯諾爾地方。今噶爾丹自枕愛山後。掠取左右翼台吉等。至志木爾地方。土謝圖汗之子噶爾丹台吉與戰大敗。僅以身免とのべてゐる。これによれば噶爾丹が兵三萬餘を率ゐて來攻し、我が扎薩克圖汗を誘ふて叛き去つたから、我が土謝圖汗は兵を率ゐて追ひ、これを執へて歸つた。その後噶爾丹の弟多爾濟扎卜等來攻した爲、追撃して之を殺した。噶爾丹は再び來攻したから、土謝圖汗等之を追ふて噶爾丹の所

駐地に迫つたが、達賴喇嘛の使者が遣した人に遇つて、皇上の諭和を宣示されたので退却した。今年になつて噶爾丹が大舉して侵寇し來り、喀爾喀が大敗するに至つたといふのである。これを前年土謝圖汗が噶爾丹の侵略を報じたものと比較してみると、東華錄廿六年九月庚子喀爾喀土謝圖汗戴青墨爾根台吉遣使奏に、噶爾丹書至。我等曾遣使致覆本意終不釋。然且喀爾喀之在厄魯特處者。及厄魯特之向與喀爾喀通好者。俱言噶爾丹分南北兩路來攻。喀爾喀右翼人等。除札薩克圖汗及得克得黑戴青台吉之外。餘俱言。噶爾丹興兵是實。我界上人等驚惶屢促出兵。赴彼應敵。是以率兵起行。再去年盟誓時。札薩克圖汗之情形。非特尙書阿喇尼見之。他人亦盡知之。彼見今與厄魯特杜噶爾阿喇布坦台吉。一處遊牧。視其情狀。恐屬窺伺。此爲馳走とある。これによれば噶爾丹から土謝圖汗に書を送つて交渉してゐる。然しさうした噶爾丹の交渉もまごまるに至らなかつた。と同時に噶爾丹侵寇の噂が高まつたものであらう。土謝圖汗はこの噶爾丹の興兵は事實であつて、界上人等驚惶して出兵を促すから、こゝに兵を率ゐて出發するといふのである。まだ噶爾丹の出動せぬ前にその噂によつて出兵したものゝやうである。ホワーズの蒙古史によると、會盟後土謝圖汗に平和實現の意がないので、會盟に於いて達賴喇嘛の代表者を輕侮したのを怒つてゐた噶爾丹は使を送つて、その苦情をのべ條約の實行を迫つた。この使の苦言が喀爾喀の胡土克圖を立腹させ、彼はその使を縛りあげ、無禮な返書をつけて突きかへした。これによつて兵を出して札薩圖汗を打ち破り、それから噶爾丹の領地に侵入して、彼の弟を捕へて殺しその首を槍の先に突きさして衆に示した。これに激怒して噶爾丹は喀爾喀にむかつて大舉進軍したのは何等驚くべき

ことではない。その軍中には又西喀爾喀の長が参加してゐた云々(ホワリス蒙古史第一冊 第八章土謝圖汗の部)とある。これによつて土謝圖汗奏中の往復文書の内容が明白になるし、又これ等によつて先攻に出たのは土謝圖汗であつたとみるのが至當のやうである。烏闌布通の大勝後、康熙帝は内蒙古に亡命中の喀爾喀蒙古を多倫諾爾の地に會盟せしめて、正式に清朝に服屬の禮をこらせたが、その會盟に於いて先づ喀爾喀が噶爾丹と構兵するに至つた次第を明らかにし、その是非直曲を定めたが、この時馬齊等が奏して、土謝圖汗澤卜尊丹巴胡土克圖等。盡壞喀爾喀生計致起兵端。其引罪之奏妄稱札薩克圖汗得克得黑墨爾根阿海背喀爾喀。依附噶爾丹博碩克圖。因用兵擊殺之。巧辭掩飾殊屬不合。應將土謝圖汗削去汗號。爲間散台吉。澤卜尊丹巴胡土克圖削去名號。爲小喇嘛。仍令土謝圖汗管轄(東華錄康熙卅一年五月丙戌)とのべてゐる。この馬齊等の奏に札薩克圖汗が噶爾丹に投じたといふのは事實にあはぬ。それを口實として土謝圖汗等兵端を起し云々であるのはどうか。札薩克圖汗が噶爾丹と好を結びしことは、同じくホワリスに庫掄伯勒齊の會盟にカルマクの長であり札薩克圖汗の Patron である噶爾丹の代表者も其處にゐたといひ、又噶爾丹の Protesse 沙喇云々といつて噶爾丹をその庇護者としてゐるが、先の土謝圖汗澤卜尊丹巴の兩奏をみて考へても兩者間に關係のあつたことが首肯出来ることもふ。事實この問題によつて土謝圖汗と噶爾丹の間に隙を生じたものであり、兩者伯仲の勢力の間にいる／＼のデマが飛び、遂に土謝圖汗の方から出兵したものでないかと思はれる。一方噶爾丹は又その出兵の理由として、常に罪なくして札薩克圖汗を殺し、更に侵入して我が弟多爾濟札卜を殺したことをあげて戰の責任は喀爾喀にあると主張してゐる。康熙帝も亦公然こ

れを認めてゐたやうである(當時の敕諭中)。西域に勃興した噶爾丹に對抗して隱然たる勢力を備へてゐたのは、土謝圖汗と哲卜尊丹巴の兄弟であつた。ブルジヤリによると、この時代の喀爾喀は成吉斯汗の直裔として、又その發祥の地に住む者として、大きな自負心をもつて全蒙古民族に臨んでゐた(ブルジヤリ一章)。ことがわかる。吾々はこの自負心をもつて土謝圖汗は噶爾丹に對抗したことを知ると同時に、當時の土謝圖汗はもはや喀爾喀左翼の土謝圖汗ではなくて、全喀爾喀の長として重きをなし、その實勢力を擁してゐたことを考へねばならぬ。

魏源の聖武記は噶爾丹の喀爾喀侵入について、會喀爾喀土謝圖汗。執殺札薩克圖汗。而奪其妻。三部内闕。我朝遣使借西藏達賴之使。和解三部。噶爾丹使其族人多爾濟札布隨而覘之。故使嫗罵土謝圖汗。以激其怒。土謝圖汗果執殺之。噶爾丹遂藉詞報復。揚言借俄羅斯兵且至。喀爾喀探之。無其事守備懈。

而噶爾丹言之不已。喀爾喀益不信。噶爾丹潛遣刺麻千人。游牧其地。喀爾喀亦不以爲意也。二十七年夏噶爾丹領勁騎三萬。逾杭愛山突襲其帳。游牧刺麻從中應之。土謝圖汗倉卒潰遁(康熙親征準噶爾記)と記し、又當時

の喀爾喀蒙古に就いて、初喀爾喀世雄漠北。及中葉專倭刺麻。習梵唄。懈武事。又部族嗜酒。自相陵蔑遂爲厄魯特覬覦(國朝綏服蒙古記二)と述べてゐる。蒙古民族の衰微はこれは被ふべからざる歴史上の事實である

が、西北一帯を攻略席捲し先には西方回教國にまで大遠征してゐる噶爾丹の軍に紛碎されたからとて、當時の喀爾喀を直ちにかくの如く墮落せる蒙古と觀るのはあたらぬ。これは清朝治下に入つて百數十年の平和を満喫した魏源時代の蒙古をとほしてみた蒙古觀ではないか。この時代に既に全く遊惰となり

噶爾丹の警に備へず、つまらぬ口實を噶爾丹に與へてその侵略蹂躪にまかせた如く記した聖武記の記事は少くとも妥當ではない。然しながらかくの如き噶爾丹觀喀爾喀觀は魏源のみならず、一般的な通念になつてゐるのではないか。清朝史家の西北問題に對する淺見誤謬は、趙翼の皇朝武功紀盛に、喀爾喀に二汗有り左翼は土謝圖汗と號し、右翼は車臣汗と稱す(平定朔漢述略)とある、一記述をみても到底讀むに耐へぬものである。魏源の如きもその認識の不足は、喀爾喀の争を單なる私闘の如くみてゐるやうであるが噶爾丹侵入の因となつた喀爾喀の内寇はもつと大きな歴史的觀點からみるべき左右兩翼の勢力争であつた。換言すれば下り阪にあつた蒙古民族の絶えざる内紛状態の中から擡頭した土謝圖汗部による全蒙古制覇の争であつた。蒙古近世史上に於ける大きな政治上の争として考察せねばならないとおもふ。

(二)

蒙古遊牧記によれば、喀爾喀は達延汗の末子格埒森札賚爾琿台吉が、その兄達の内蒙に移住せる際一人故土に留つて部する所を喀爾喀といひ、又その衆萬餘を分つて七旗となし、子七人に授けて領せしめ、左右兩翼に分つたとある。ホワースにはその子七人の名が見えてゐるし、更にシュミツトを引用して、西翼には第一第二第四第七の子、東翼には第三第五の子が（その第六子は子孫がなくシュミツトには出てゐないさうである）屬した(ホワース同上書第八章第一節)と述べてゐる。札薩克圖汗はその第一子阿什海達爾漢琿台吉の子孫であり、土謝圖汗はその第三子諾諾和から出で、車臣汗は第五子阿敏都喇勒、賽音諾彦部

長は土謝圖汗と同じく諾々と和から出てゐる。喀爾喀には元來汗號はなかつたが、素巴第、賽布、碩壘の時代に至つて、それ〳〵札薩克圖汗土謝圖汗車臣汗の汗號をこなへた。遊牧記によればその三汗の汗號をとつたのは略同時代であつたやうである。

以上によつてみれば右翼札薩克圖汗は喀爾喀の祖格埒森札札賽爾琿台吉の長子阿什海達爾漢琿台吉の子孫である。その爲、全喀爾喀から尊敬をうけ、元來七旗の長たる地位を占めてゐたやうである。皇朝藩部要略をみると、順治三年車臣汗碩壘は蘇尼特部長等を誘ひ、土謝圖汗等もこれに關係して清朝に叛旗を翻した。その後で札薩克圖汗素巴第は代つて罪を解かんと同族俄木布額爾德尼と上書して好を乞ふたが、順治帝はこれに對してその辭は悖慢であるといつて拮責されてゐる。又十一年に順治帝は札薩克圖部人額爾德尼諾木齊を諭されて、爾奏言。喀爾喀左翼四旗。皆爾統攝。凡有敕諭罔弗遵行。今即如所請。可速飭爾部長遣子來朝云々とある。これらを見ると札薩克圖汗は自ら喀爾喀の長として、車臣汗土謝圖汗に代つて之れ等の罪を解くやう清朝に交渉したものであらう。その後又左翼の四旗は札薩克圖汗の統攝するものであることを清朝にみとめさせるに成功したものと思はれる。かくの如き札薩克圖汗の地位が、その後長い間の内紛によつてその勢力を失墜すると共に忘れられた状態にあつたのではないか。車華錄康熙二十九年五月甲午の條に、厄魯特に投じて阿爾泰山南にゐたといふ額爾克阿海巴郎が、この時清朝に來降して、札薩克圖汗は喀爾喀七旗の長なることを述べて、札薩克圖汗の後繼者を立つることを請ふた奏言が載つて居る。これに對して康熙帝は議政王大臣等に議せしめた結果、今年喀爾喀が

來降して會闕があるから、その時に決定することになった。愈々大會盟となつた東華錄康熙三十年五月丙戌の條に、馬齊等が又奏して、札薩克圖汗乃喀爾喀七旗之長。累世抒誠進貢。札薩克圖汗名號。似應仍令承襲と、やはり札薩克圖汗が喀爾喀七旗の長なることをのべてゐる。喀爾喀右翼のものゝみならず清朝のものもこれを認めてゐたことがわかる。先に引用せる康熙廿三年二月庚子の條にも、成袞が達賴喇嘛に土謝圖汗が逃亡者を歸還せしめないことを訴へた時、達賴喇嘛が七旗を諭して、汝等七旗は共に札薩克圖汗を尊ばねばならぬことを説いてゐる。達賴喇嘛もこれを承認してゐるやうである。

康熙帝は失張りこの點に考慮をはらひ、多倫諾爾の會盟に於いて札薩克圖汗の後繼者をたてる時、現在の子は幼稚なる爲、皆から賢を以て稱せられてゐた汗の親弟策妄札卜を立て、彼を最高の爵位和碩親王に封じてゐる。この康熙卅年多倫諾爾大會盟の意義は誠に大きい。第一には外蒙喀爾喀をして正式に清朝に服屬の禮をもらせたことであつた。光緒大清會典事例卷九百六十九封爵外札薩克をみると、外蒙古王族の封爵は全て康熙卅年以後になつてゐる。これをみてもその間に服屬關係を生じ、正式に封爵されたのは大會盟以後とみるべきであらう。第二には長年にわたつた喀爾喀の内紛問題を解決したことであつた。噶爾丹と對陣中の内蒙古に於けるこの大會盟に康熙帝は紛争絶えなかつた外蒙喀爾喀に對して如何なる政策をとつたか。こゝに特に注意すべきはこの點である。この會盟に際し、理藩院が遵旨酌定せる喀爾喀王族の席次がある。これを見ると土謝圖汗、澤卜尊丹巴胡土克國、札薩克圖汗の弟策妄札卜、車臣汗の順序であり。これを第一行として餘を七行に分ち、次序を以て席につかせてゐる。又康熙帝の

命によつて同じく會盟に臨んだ内蒙四十九旗と外蒙喀爾喀は同列におかれてゐる。こゝに於いて外蒙も又内蒙四十九旗に實施されてゐた旗制に編成されてその官爵が採用され、早くから服屬せる内蒙四十九旗と一視同仁にみられることになつた。外蒙についてはこの席次をみればわかるやうに、土謝圖汗が第一位を占めてゐるのをみると、土謝圖汗を喀爾喀に於ける長たる地位に据えたものであるが、これは現状保持を主眼とした清朝の政策であることはいふまでもない。實際喀爾喀に於ける實權者は土謝圖汗であり、特に札薩克圖汗部の右翼蒙古が散亡してゐた當時にあつて清朝治下に投降した喀爾喀蒙古は、左翼喀爾喀を主體としたものゝやうであるから、これは當然なことと思はれる。然し從來喀爾喀の長であつた札薩克圖汗に對しては、公平を標榜した清朝として、その後繼者策妄札トに唯一人最高爵位の和碩親王を與へたのである。然しこの時策妄札トは汗號を襲いでゐない。大清實錄をみても土謝圖汗哲ト尊丹巴の次に席したのは親王策妄札トであつて、土謝圖汗策妄札トではなかつたやうである。これは當時札薩克圖汗の現存せる子はまだ幼く、策妄札トに親王を與へたのであるが、この策妄札トもまだ若くこの時皇帝は皇子の衣冠を賜つたといふ弱齡であつたのと、當時右翼喀爾喀は殆んど散亡してゐた爲ではないかと思はれる。札薩克圖汗が汗號を襲いだしたのは康熙四十二年である。蒙古遊牧記に、三十年特封策旺札布和碩親王。代領部衆。始稱札薩克圖汗部。四十年命仍襲號とあつて、三十年には親王の爵位を與へてその部衆を領せしめ、四十年にはじめて汗號を襲いだやうになつてゐるが、大清會典大清一統志等の官書には何れも四十二年になつてゐる。皇朝藩部要略も亦四十年だが、その藩部世系表をみると、

矢張り四十二年とある。本文の方は四十一年四十二年の記事なく四十年から四十三年にとんでゐる爲、錯雜を來したのではないかと思はれる。これ等の記事によつて汗號を襲いだのは矢張り四十二年としてをく。噶爾丹の死後、喀爾喀蒙古は故土に歸つたが、其處に歸つて部衆も集り汗號を襲いだものではあるまいか。當時右翼の部衆散亡してその多くは左翼に集り、左翼の部衆過多になつてゐたことは、嘉慶大清一統志喀爾喀文中の註に引用せる、會典三十一年。編喀爾喀旗分左領。分爲三路。將土謝圖汗之十七札薩克爲後路。車臣汗之十二札薩克爲東路。札薩(克)圖之九札薩克爲西路。各按旗分給印によつてわかる。土謝圖汗車臣汗の合計二十九札薩克が左翼であつたわけであり、それに對して札薩克圖汗部の右翼は僅かに九札薩克である。かくてこの卅一年に喀爾喀が從來左右翼に分れてゐたのを三路となし、土謝圖汗の勢力下にあつた左翼より車臣汗部を獨立させることになつたものと思はれる。蒙古遊牧記喀爾喀總叙をみると、康熙卅五年朔漠平定して喀爾喀諸部が再び舊牧に還つた時は、三部を編して五十五旗となしてゐる。その五十五旗の下にある註に、理藩院則例。圖什業圖汗。車臣汗二部落四十三旗台吉内云々とある。これによつて計算すると札薩克圖汗部はこの時十二旗になつてゐる。卅一年より卅五年に至る間に圖什業圖汗車臣汗の二部落にて十四旗の増加をしてゐるのに對して、札薩克圖汗部は三旗を増したのみである。かくて雍正三年になつて更に土謝圖汗部より賽音諾顏部十九旗を分離して一部となしたことは、皇朝藩部要略に……凡十九札薩克。別爲一部。以其賽音諾顏號冠之。稱喀爾喀中路。不復隸土謝圖汗。喀爾喀有四部。自此始とあるによつて窺ひ知られる。遊牧記喀爾喀總叙によると雍正三年に

は四部七十四旗になつてゐる。かうして喀爾喀の四大部が成立したが、それは土謝圖汗部の勢力削減の政策として生れ出たものであり、喀爾喀の平和はこれ以後、四大部の勢力均衡状態によつて保たれることになつたのである。

噶爾丹の指摘した土謝圖汗の傲慢横暴は、當時喀爾喀に占めたその勢力と併せ考ふる時、それは事實であつたことが首肯出来る。土謝圖汗自身その行爲の不正なるをみこめてゐたことは、二回の會盟に出席せず、清朝治下に入つてからも尙ほ清朝が噶爾丹との間に媾和せしめんとした會盟を拒んで居り(康熙八年正月丙戌の條)卅年の大會盟に於いてはじめて自己の非を認め謝罪して汗號を許された、これ等をもてま

かるのである。然し吾々は噶爾丹と拮抗した土謝圖汗をおもふとき、その影にあつた哲卜尊丹巴胡土克圖を忘れてはならない。ホワースにも土謝圖汗が扎薩克圖汗の逃亡者を與へなかつたのは、哲卜尊丹巴胡土克圖の言によつたやうにのべてゐるが、かの庫倫伯勒齊の會盟に哲卜尊丹巴胡土克圖が使者として臨席したのは、西藏と清朝の主唱下に會盟を餘儀なくされた結果、遂に哲卜尊丹巴胡土克圖自身がやむなく出馬することになつたのではなかつたか。哲卜尊丹巴胡土克圖所謂蒙古第一代活佛の偉大に就いてはいろいろの説話が蒙古人の間に残つてゐる。この第一代活佛こそ土謝圖汗部の實權者であり、全喀爾喀を率ゐつたのである。英雄噶爾丹の侵入した喀爾喀には又この偉大なる活佛がゐた。この點に特に注意したいとおもふ。

清朝治下に入つた土謝圖汗の勢力は漸次削減されたのであるが、全喀爾喀に於ける哲卜尊丹巴胡土克圖の地位は、康熙帝の保護下に益々その地歩を固めた。然しこれは從來占めた胡土克圖の地位を康熙帝

が利用したものに外ならない。喀爾喀に於いてそれまで占めた哲ト尊丹巴胡土克圖の地位は、多倫諾爾大會盟に於いて土謝圖汗につぐ席次にあるのをみれば略わかる。ボズドニエフの蒙古及び蒙古人によると、哲ト尊丹巴胡土克圖は又この大會盟に於いて始めて康熙帝に謁見したのであるが、その席上康熙帝に蒙古諸王を紹介したのは彼であり、一々その人物評を下して謁見せしめた(同書第(八章))といふ。これより先き喀爾喀が清朝に來降したのも一に彼の言によつて決したといはれてゐる。噶爾丹の侵略に遭つて喀爾喀蒙古は露西亞に降るべきか、乃至は支那に附くべきであるかに迷つて決を哲ト尊丹巴胡土克圖に請ふた。その時胡土克圖は、俄國はもと佛を奉ぜず、習俗は我等と異り異言異服であり、久しく安住する處ではない。どうしても全部支那に投じて萬年の福を得るに如かずといつて、遂に康熙帝に投降することになつたといふ。これはかの松筠が綏服紀略に於いて述べてゐる處であり、それが又蒙古遊牧記に引用された註文附記をみてもわかるやうに、當時から蒙古人間に傳へられた餘りにも有名な史話である。かうした事情は又その以後康熙帝と活佛を兄弟もただならぬ關係に置いたものであるが、當時の活佛が最初から清朝に降る意圖があつたかどうかは甚だ疑はしい。

コロストヴィツツの成吉斯汗よりソヴィエト共和國までによると、彼は噶爾丹の侵略をうけるや、直ちにトランスバイカルにゐた俄羅斯の使節ゴロウインに使者をたて、俄羅斯の國民として編入してもらふことをたのませた。然し使者がゴロウインの下に現れたのは、既に喀爾喀が滿洲人に降服してしまつた後であつた(同書第(二章))といふ。康熙廿七年七月哲ト尊丹巴胡土克圖は清朝へ噶爾丹の侵入を報じて

あるが、その九月には土謝圖汗と共に清朝に來攻してゐる。その途上對露交渉に派遣された支那側の使節阿喇尼等と遇つてゐる。これはカーヘン著早期の露支關係によると、ゴロウインは一六八七年十月から一六八九年六月まで、ウデインスク、セレンギンスクの地方に殆んど二ケ年間滞在してゐる。そのゴロウインと會議する筈になつてゐたセレンギンスクに往く支那側使節であつた。ロシヤ使節としてこの地方に派遣されたゴロウインは先づ露支關係緊迫の際とて、蒙古と關係を結ばんとし、その爲一六八六年モスコ―出發以來二ケ年間草道をくつてをり、ウルガ即ち庫倫の胡土胡圖の下に遣使して好意ある手紙と贈物を送つてゐる(同書第二章ゴロウイン使節の條)のをみると哲卜尊丹巴とゴロウインの關係も又以前から生じてゐたことがわかる。之等からみてこのロシヤ遣使は決して突飛な事件ではなかつたのである。喀爾喀が活佛の一言によつて清朝服屬となつたが、それはやむを得ない事情のもとに行はれたとみるべき點があり、その最初には態度決せず俄羅斯にも使を遣つたのであつた。ボズドニエフによると、喀爾喀が清朝に投降するやうに決定したのは、噶爾丹に追はれて境外に出て内蒙の阿魯額圻蘇圖に會盟を行つて、哲卜尊丹巴の決を求めた結果であつた(蒙古及蒙古人第八章)といふ。既に清朝勢力下の内蒙に入つて、大勢既に定つた後の決意であつたやうである。當時外蒙に對する俄羅斯と清朝の勢力關係をみる時、寧ろ俄羅斯に投じて喀爾喀の獨立をはからんとしたものではなかつたか。喀爾喀に雄視せんとした活佛の考としては、その方が自然のやうに思はれる。この蒙古第一代活佛哲卜尊丹巴胡土克圖こそ、その後に於ける外蒙喀爾喀の運命を決したものといはねばならぬ。それはこの裁決の一言を與へたといふのみではなく、もつと深く深い原

因、即ち當時土謝圖汗部の勢力を背景として全喀爾喀をかくの如き状態に導いた責任者として當然哲卜尊丹巴胡土克圖は今日から省られねばならぬと考へるのである。

(三)

噶爾丹の喀爾喀侵入についてはどうしても彼と喇嘛教の關係を明白にせねばならぬ。

厄魯持の博克碩汗噶爾丹と喀爾喀の哲卜尊丹巴胡土克圖溫都爾格根は、共に西藏に入つて喇嘛教を修めてをり、第五代達賴喇嘛旺羅卜藏札卜素の弟子であつて、その汗號名號は何れも達賴喇嘛から贈られたものであつた。第五代達賴喇嘛は歴代達賴喇嘛中の傑物であつて、その初め青海和碩圖部の額實汗を西藏に招き、その兵力によつて喇嘛教の諸派を抑へて黃教喇嘛を流布せしめたが、その後彼の勢力は實に政教兩方面にわたつて西藏新疆蒙古の西方諸國を壓してゐた。その爲第五代達賴喇嘛の死するや、その死は擾亂の虞があるとして公表されず、十六年間の長年月その死が秘せられてゐた。その間達賴喇嘛の地位にあつて實權を握つてゐたのは、達賴喇嘛の第巴（康熙帝の勅諭中に理事の人とあり）桑結であつた。この怪僧の時代に噶爾丹の喀爾喀侵入が行はれてゐる爲、事件が非常に複雑となり、且つ西藏、西北地方一帯に涉り、喇嘛教にも關することゝて史料に乏しく、その真相は明瞭を缺き直ちに斷定を下し得ないものが甚だ多いのであるが、自分はこゝに於いても又その初期の問題について一、二考察してみたい。

東華錄廿六年七月甲戌の條に侍讀海三代は當時對露談判使節としてその途上にあつた阿喇尼の使として、澤卜尊丹巴の處に行きその途上厄魯特軍に遇ひ、噶爾丹の奏疏を携へて歸つてゐる。その疏には、澤卜尊丹巴胡圖克圖土謝圖汗は達賴喇嘛の教に違ひ、噶爾丹西勒圖を尊び禮せず、之に告ぐるに禮法を以てしたが聽かず、竟に兵を興して襲來した。我は達賴喇嘛の靈に仗つて來つてその居を毀したのである。彼兩人は衆の許す所ではなく殆んど往く所がない、たとひ往くとも亦納れられないのである云々。又海三代に囑して轉奏して澤卜尊丹巴は天朝に來り投ずれば拒絕するか、之を擒へて與へよとのべてゐる。これが噶爾丹の喀爾喀侵入にあつて清朝におくつた最初の奏疏のやうである。これをみれば土謝圖汗哲卜尊丹巴は達賴喇嘛の教に違ひ云々が出兵の理由になつてをり、それには廿五年の會盟に於ける哲卜尊丹巴の不遜が直接問題になつてゐることがわかる。この會盟に於ける噶爾丹西勒圖に對する哲卜尊丹巴の抗禮は何れの書にも説く所であるが、哲卜尊丹巴としては、又それには一つの理由があつたやうに思はれる。大清實錄廿五年六月乙卯の澤卜尊丹巴の邊諭覆奏をみると、……今蒙聖慈。念喀爾喀七旗不睦。遣使於達賴喇嘛。而達賴喇嘛亦遣噶爾丹西勒圖爲使赴盟。諭臣亦至盟壇。共議其事。臣當遵旨同赴盟所。竭誠公議。以仰副聖懷とあつて、胡土克圖の會盟に臨んだのは清朝の命によつて出席したことがわかる。然し又その終に上命移文尙書阿喇尼。噶爾丹西勒圖等知之とあるのをみると、哲卜尊丹巴の出席は會盟が近づいて突差に決定したことが明瞭である。これは同上廿五年乙酉の條に、達賴喇嘛と約定の日も近づいたから阿喇尼等を前往せしめ、又喀爾喀各地に使を遣り會盟の開催を報せしめてゐる。

この報をもたらした處土謝圖汗部の態度により會盟困難とみたら、急に哲卜尊丹巴をその主催者の一人に加へたのか。乃至はこの報に接して土謝圖汗部はうらたへ胡土胡圖の方から清朝に交渉して、かうした形式にて出席することになつたのか。閏四月の會盟が十月まで延びてゐるのはかうした原因によつたのではないかと考へられる。何れにしても彼は土謝圖汗の代理として出席したのではない。同上廿五年十月戊午の條に、理藩院尙書阿喇尼が會盟の次第結果を報告して、臣等遂令兩汗及濟農台吉等。於本月二十三日檢選所屬才能寨桑六十餘人。俱至喀爾喀噶爾璽西勒圖澤卜尊丹巴胡土克圖前。設立重誓。兩翼互相侵占之台吉人民。令各歸本主。一切應結事件。俱審定完結とある。こゝに兩汗とあるのを見ると果して土謝圖汗自身が出馬したのであるか、二十五年四月、車臣汗の處にも遣使されてゐるのを見ると、その出席が考へられ、これは札薩克圖汗と車臣汗を意味するのか、乃至はこの會盟に臨席してゐる土謝圖汗の長子噶爾且多爾濟か、弟の西第什里の何れか汗を代表したのか、これ等の點は明瞭ではないが、とにかく彼は土謝圖汗の代理としてとなく、全喀爾喀問題を解決する胡土克圖として臨席したものである。だからと云つて直ちに達賴喇嘛の使者と同等の席につく理由にはならないが、それを要求した根據も亦考へられるわけである。

噶爾丹は然し土謝圖汗哲卜尊丹巴胡土克圖を攻撃したのは、單に廿五年會盟の席に於ける無禮のみではなかつた。彼が土謝圖汗兄弟を達賴喇嘛の教に違ひ、達賴喇嘛の敵であること、これを最後の最後まで口にしたのを見ると、もつと深い理由がなければならぬ。これがたゞひその侵略行爲を糊塗する口實

に過ぎなかつたにしても、口實となり得る根據があつたことをおもふ。こゝに於いて哲ト尊丹巴の地位そのものを觀察して考へてみねばならない。蒙古研究特に喇嘛敎研究の第一人者ボズドニエフの名著蒙古及び蒙古人(東亞同文會の邦譯あり)には、特に哲ト尊丹巴胡土克圖の呼弼爾罕に關する一章があつて、現地にて採集せる資料傳説の研究が載つてゐる。これが哲ト尊丹巴に關する最もまとまつた研究のやうに思ふが、こゝに紙面の都合上一々引用は出來ない。このボズドニエフの記述によつて知られるのは、噶爾丹軍の最初に侵入した厄魯德尼招の寺院は達賴喇嘛派に對立した釋迦派の建てたものであつたこと、活佛の地位も又達賴喇嘛によつて認定されたものであるといつても、彼がその勢力を外蒙に張る一手段として推したもので、地位そのものは達賴喇嘛の宗派に屬するものではなかつた。即ち彼は達賴喇嘛から黃敎派の奥義を授けられた弟子ではあるが、その哲ト尊丹巴は釋迦派のダラナタの呼弼爾汗であつて、達賴喇嘛と元來仇敵關係であつた宗派に屬してゐることである。これ等の點からその後噶爾丹が西方に割據して、西藏と喀爾喀の關係が疎遠となるに至つて、自然西藏に依存しなくなつたことが考へられる。

同書同章には又、一六五一年活佛が喀爾喀に歸ると、達賴喇嘛の崇拜者となり、ゲルグバ派の尊信者となつたから、從來喀爾喀に行はれた釋迦派流の儀式宗規等を根絶するに力を盡したであらうと思はれるが、全くこれに關する證差のないのは怪しむべきである。想ふに活佛と同行したゲルグバ派の喇嘛輩(六百人といふ)は喀爾喀に敎義の發達したる程度の微々たるをみて、喀爾喀人とは毫も争ふことなく、人民が知らず識らずの間に之を自派に化することが出來ると看破したものらしい。是を以て西藏

の喇嘛達が苦心したのは、唯活佛をして釋迦派の古寺に住まはせないことであつた。かくて新寺院の建立に着手したが、その一つが今日の庫倫であつたことが述べられてゐる。これ等の記事に依つて先に阿巴岱汗の持ち歸つた喇嘛教は釋迦派に屬したものであることがわかるし、その後圖蒙官等黃教流布に盡力したといつても、尙ほ依然として黃教以外の宗派の勢力が支配したことは同書に又かの釋迦派のグラナタが西藏から迎へられて最後に蒙古で死んでゐる點等から考へられる。たゞ蒙古人の教義が發達してゐなかつた爲、これらの教派は史上に残るやうな大問題を惹起するに至らなかつたものであらう。噶爾丹が哲卜尊丹巴は達賴喇嘛の敵なりと稱して喀爾喀に侵入し、先づ厄魯德尼招を襲ひて當時喀爾喀に於ける最大の寺院を焼き拂ひ、更にホワースによつて哲卜尊丹巴の建立にかゝる二寺院を破壊したとあるのは、達賴喇嘛の教敵たる釋迦派の寺院としてかくの如き亂暴な破壊を敢てしたのではなからうか。噶爾丹の喀爾喀侵入以前哲卜尊丹巴は、ホワースの前掲書皇朝藩部要略等によれば厄魯德尼招にゐたやうである。喀爾喀に歸つた當座は新寺院にゐたにしても、その後又こゝにも住つたことが知られる。當時その教義もどこまで、黃教派を遵奉したか疑はしい。厄魯德尼招の寺院は元來釋迦派に屬し、歴史ある寺院であるから、活佛自身の宗派も矢張りそれに近いものではなかつたか。

厄魯特蒙古と喀爾喀蒙古は政治上から對立し、哲卜尊丹巴は喀爾喀蒙古に一大勢力を布くに及んで、その態度は自然不遜となり、ひいては達賴喇嘛の言を奉ぜず、遂に達賴喇嘛の代表者と席を争ふに至つた。それは完全に教義上から對立したものでは勿論ないにしても、そうした活佛の態度に對して厄魯特

蒙古は殊更教義宗派の點から問題となし、西北地方一帯にわたる喇嘛の心をこらへたものではなかつたかと考へる。達賴喇嘛の噶爾丹に使はした濟隆胡土克圖が全く噶爾丹の影武者となり、烏蘭布通の役には噶爾丹の爲に誦經し、且つその戦日を選び、噶爾丹の敗れるに及んでは又講和を以て詞となし、その交渉中に噶爾丹を逃亡せしめた如き、又屢々清朝から噶爾丹に使はされた伊拉克三胡土克圖が、遂に噶爾丹に投じた如き、その他大小喇嘛の噶爾丹に心を寄せ、これに投じた例は枚擧に遑がないのである。

これは達賴喇嘛の言を弄した第巴の策謀であり、その指令によることも考へられる。康熙帝の如き、噶爾丹自身第巴の言に左右されたやうに観てゐるが、これには又その一面に於いて當時哲卜尊丹巴胡土克圖の政教兩方面に占めた地位と勢力を考慮に入れなければ、到底理解し得ぬことではないかと思ふ。